

## 宮本君山研究序論

高杉志緒

### 一、はじめに

江戸時代、様々な絵入りの板本（絵本）が誕生した。江戸、上方、それぞれの地で絵本が出版されたが、研究の面から現状を換言すれば東高西低と云えよう。江戸在住の浮世絵師が挿絵を寄せた絵本の研究は、織田一磨『浮世絵と挿絵芸術』（万里閣、昭和六年）、仲田勝之助『絵本の研究』（美術出版社、昭和五年）、鈴木重三『絵本と浮世絵』（美術出版社、昭和四年）の名著をはじめ、活況を呈しているが、上方の特に近世後期については未解明な部分が多い。

筆者は、近年、近世後期に活躍した大坂の絵師、丹羽桃溪（通称大黒屋喜兵衛、宝暦十（一七六〇）年生、文政五（一八二二）年没）を中心に考察を行ってきた（丹羽桃溪研究序論——伝記研究を中心に——『福岡大学大学院論集』三十六巻一号、平成十六年八月。「近世大坂画壇の側面——丹羽桃溪と圓通寺をめぐる——」『東北亜文化研究』九号、平成十

七年十月。「上方狂歌絵本の側面——丹羽桃溪を中心に——」『東アジア日本語教育・日本文化研究』九輯、平成十八年三月他）。

丹羽桃溪は、江戸の浮世絵師、葛飾北斎と同年生まれ。同時代の大坂では「当時名だゝる桃溪士の画」（『画本道の手引』序文、文政六年刊）と評され、『国書人名辞典』三巻（岩波書店、平成八年）は二十三作品の板本を紹介するが、現代の知名度は比すべくもない。

本論文では、桃溪と同時代に大坂で活躍した絵師、宮本君山（生没年不詳）について取り上げる。何故君山か。理由は、桃溪の画業を探る内、何度か君山の名を目にした為である。例えば、桃溪は君山の主催した書画展に出品している（『新書画展観款録』文化三年展観）。絵本でも、『狂歌手毎の花』三編（文化九年刊）、大原東野編『五畿内物産図会』（文化十年刊）には君山の挿絵も掲載される。この二書は、他の多数の絵師の挿絵と共に掲載されているので、個人的な関わりという訳ではなからうが、特に疑問を持ったのは『狂歌浪華菅

笠』（文化四年刊）の存在。蔵板目録には「画工丹桃溪」と記される

のに、何故か君山の落款が四箇所みえる。板元の意向や都合であるうが、君山自体の活動に興味を持つきっかけとなった。そこで、本論では、研究の手始めとして君山の伝記を再考し、大坂騒壇の側面を探りたい。

尚、本論文にて「絵本」として扱う板本は、桃溪の時と同様、一図（一面）でも絵が含まれている板本とする。

### 二、宮本君山研究史

最初に、宮本君山の研究史を振り返りたい。その前提として、君山の伝記に関する近代の人物辞典等による記載を挙げておく。

筆頭に挙げられるのは、暁鐘成原著『浪華名家墓所集』（万延元年以前成立、自筆稿本焼失）であろう。かろうじて「画 宮本君山 名 政瓊字伯鳳 備中」と、名と出身地のみが記された一行がみえる（国立国会図書館蔵本（明治一七年岡本本の写本）、「五一」丁裏一行目）。

この書は、大坂で活躍した人物を忌日順に記し、市中の墓所所在寺も記すが、君山の場合、忌日も墓所も記載がない。従って君山は、大坂で「名家」と認められていたが、忌日・墓所共に周知されていなかったことになる。あるいは君山が大坂以外の地で亡くなったた

め、不明となった可能性もあろう。

その他、明治、大正期に成立した江戸期の大坂人物伝として著名なものに、岡本撫山『浪華人物誌』（藝苑叢書、明治二七年以前成立、大正初年発行）があるが、君山についての記載は皆無。

昭和期に出版された、石田誠太郎『大阪人物誌』五巻（石田文庫、昭和二年刊）には「●宮本君山 君山 宮本氏、名は政瓊、字は伯鳳、君山と號す、備中の人なり浪華に來たり畫を以て業となし特に山水人物を畫くに妙を得たり文政頃の人なるべし・著書 漢画獨稽古 二」と、『浪華名家墓所集』の記載に加え、君山の得意な画を「山水人物」とし、活躍期を「文政頃」と規定、著書として『漢画獨稽古』を挙げる。

その他、昭和期における特記すべき伝記記載には、以下の二つが挙げられよう。昭和戦前期迄で最も詳細なものに田中誠一『備作人名大辞典』（備作人名大辞典刊行会、昭和十二年）があり、戦後では『近世大坂画壇』（大阪市立美術館、昭和五八年）中の泉武夫「拾遺大阪画人伝」がある。少々長いが双方の全文を引用しておく。

「宮本君山 備中倉敷の人

名は瓊、字は伯鳳、君山又峨洋堂主人と號す。星溪の子 幼より畫技を好み四方歴遊十五年、享和初年大阪に出て瓦町に卜居すと云

ふ。著に漢画獨稽古あり。文政十年五月歿す。配伊藤珣、字は玉黄、號は仙年、又書を能くす」(田中誠一『備作人名大辞典』一二九頁)

「宮本君山 生没年不詳 名は政瓊。字は伯鳳。号は君山、峨洋堂。俗称俊蔵。備中の人。大坂に来て画をもって業となし、山水人物を得意とした。文化四年(一八〇七)刊の(一枚摺)『浪華』画人組合(三幅対)」に登場して以来、文政七年(一八二四)刊の『新刻』浪華人物(誌)までその名が見える。文化十年(一八一三)の兼葭堂十三回忌書画展には「五星図」を出品し、文政五年(一八三〇)の阿部良山追薦展覧では補助として名を連ねている。著書として『漢画獨稽古』『於北野太融寺新書画展観款録初篇』(文化三年)、編として『新書画展観款録』(文化二年)などが遺されている。住所は瓦町心斎橋。

〔典拠〕『浪華画人組合三幅対』(文化四年)、『浪華画家見立角力組合二幅対』(文化六年)、『名数画譜』(文化十年刊)、『癸酉展観目録』(文化十年九月開催)、『浪華人物録』(撰陽奇観)所収(文化十年頃)、『統浪華郷友録』(文政六年)、『浪華金欄集』(文政六年)、『新刻浪華人物誌』(文政七年)、『浪華名家墓所集』(万延元年以前成立)、『浪華名家墓所記』(明治四四年)、『大阪人物誌・正編』(大正十五年)、『昭和二年』(泉武夫「拾遺大坂画人伝」『近世大坂画壇』二九一頁。尚、引用文中年代以外の( )内は筆者が補い、典拠の略語は正式名称に戻した。)

## 【君山研究史一覽】

### I 論文等

- イ、相見香雨「介石畫話小引」(『日本美術協會報告』第五十二輯附録、日本美術協會、昭和十四年六月)
- ロ、中野朋子「宮本君山『御ぐしあげ』——文政九年に描かれた大坂の髪型——」(『ビューティサイエンス』第一号、ビューティサイエンス学会、平成十五年十月)
- ハ、中野朋子「宮本君山筆『御ぐしあげ』の検討から(一)、(二)近世大坂風俗再考のために」(『大阪歴史博物館研究紀要』第二号、平成十五年九月。第三号、平成十六年十月。)
- ニ、田邊菜穂子「相見文庫蔵『新書画展観目録』翻刻と解題(下)」(『文献探求』第四二号、文献探求の会、平成十六年三月)
- ホ、岩佐伸一「大坂における書画会と展覧会について(一)」(『大阪歴史博物館研究紀要』第四号、平成十七年十月)

### II 展覧会出品等

- ヘ、町田市立国際版画美術館「近世日本絵画と画譜・絵手本展」(会期平成二年四月十九日〜六月十六日。出品番号一〇二、宮本君山『漢画獨稽古』乾坤二冊、文化四年。)
- ト、古川美術館(名古屋市)「師から弟子へ 受け継がれる美」

前者で気になるのは、君山の出自を「星溪の子」とし、没年については「文政十年五月歿す」と明記してある記載。筆者の田中氏には、何がしか典拠があったのだろうが未詳。同辞典には「宮本星溪」の項目が無いため、今となってはその手懸りが掴めぬ。この記載を基に『国書人名辞典』四卷(岩波書店、平成八年)にも同様の出自、没年が記される。対する後者では、「生没年不詳」と記載されるものの、主として書画会での活躍が増補される。

双方をまとめると、君山は、備中岡山の出身。享和年間(一八〇一〜三年)頃、大坂に来て、少なくとも文政七(一八二四)年までは大坂・瓦町心斎橋に留まって活躍した。画技においては山水人物画を得意とし『漢画獨稽古』等の著作を残した。同時に書画展の主権に関わった、とされる。従って、君山の画業を考える場合、肉筆画制作、板本・絵本挿絵制作、書画会の主催・参加、以上三方面からの分析が必要となろう。

次に、より細かな研究動向を振り返ってみたい。以下、「君山研究史一覽」を作成し、I 論文等、II 展覧会出品等に分類して列挙した(冒頭イ〜トは、筆者が便宜的に付記した)。

— 131 —

— 141 —

- (会期平成十七年八月九日〜十月二日、「IV 江戸・明治の絵手本」、宮本君山『漢画獨稽古』文化四年)
- チ、金沢美術工芸大学附属図書館「近世絵手本画譜類画像検索データベース」<http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/cgi-bin/edels.pl>  
(平成十四年四月一日以降公開。請求番号二四(画像有)、宮本君山著 画『漢画獨稽古』乾坤二冊二卷大本、文化四年九月)

以上、管見を概観すると、君山についての伝記以外の言及は、冒頭の一つを除き、残りは全て平成期に作成されていることに気付く。論文等、展覧会出品等に二分したが、内容で分けると、以下の三つに分類できよう。第一に、作品紹介・研究(イ、ロ、ハ)。第二に「書画展主催」について(ニ、ホ)。第三に板本『漢画獨稽古』の紹介(ヘ、ト、チ)である。

一つ目、作品紹介・研究にあたり、筆頭に挙げたのは相見香雨氏の論文。論文の嚆矢ゆえ、これのみ以下に詳述する。担し、論議からみても分かるように、この論文の主題は君山ではない。主眼となっているのは、紀州藩士であり、画人でもあった野呂介石(延享四(一七四七)年生〜文政十一(一八二八)年没)の画談が記された『介石画話』(転写本、富岡鉄斎旧蔵)の紹介。但し、この論の巻頭図版には「富岡鉄斎摹寫野呂介石像 原本宮本君山筆」が掲載され、君山に

ついでと言及も含まれるため挙げた。富岡氏本『介石画話』には、介石関連事項について鉄斎独自の雑多な書き込みがあり、君山筆の介石画像についても記すという。鉄斎は介石像について「介石翁像有二一本一。君山瓊筆。一本像前有」机。一本膝前有下石名二會稽一石上。」即ち「前に机を置いたのと、會稽石を置いたのと二本あった」と記載(前掲論文「一三」頁)。更に、冊中には鉄斎模写が挿んであったという(美濃紙一枚、前掲論文「巻頭図版」)。以下、相見氏によるこの画像と君山についての言及を引用する。

「鐵齋翁が之を寫した時には、野呂氏藏とあれば、その原本は野呂家にあつたのであらうが、今は轉じて多分和歌山の某氏にあるだらうと傳聞する。筆者君山瓊といふは宮本君山のことで、その著『漢画獨稽古』文化四年版の淵上旭江が跋文に「君山畫師、名瓊、字伯鳳、君山者其號也。吉備中州之人。予同郷の友なり。天性畫を好んで四方を遊歷すること十有五年、享和の初浪華に來り、居を瓦街に卜す」云々とある。備中の北部小阪部の東北に君山といふ山あり。その邊の人で、君山と號したのであらう。別に峨洋堂の號がある。文政六年の『續浪華郷友録』には「君山、姓宮本、名政瓊、字伯鳳、住瓦町心齋橋」とあり。其後のものに見えねば、凡そ文政天保の間に没したのであらう。その畫の師承する所を知らないが、介石

の像をかいてゐるところを以て見ると、介石に師事したか否かはともかく、介石に親炙して益を受けた人であらう。」(前掲論文「一三」頁)

以上のように、相見氏は、君山筆の野呂介石像の所在を元来野呂家にあつたものと推察。君山の伝記については、君山著の板本『漢画獨稽古』跋文から該当部分を的確に引用し、号の由来を出身地にあると考察。更に、『続浪華郷友録』を含めた当時の人名録より「文政天保に没したか」と没年を推定。加えて「介石に親炙」したことを指摘される。このように相見氏が既に昭和戦前期、鉄斎の遺品を通じて君山の作品紹介を行い、加えて君山の伝記・人物交流の考察に至るまで行っておられることは注目に値しよう。

君山筆、二作品目の言及は、中野朋子氏による大阪歴史博物館蔵、君山肉筆画帖『御ぐしあげ』についての作品研究(口、ハ)。この画帖には、当時流行の髪型が多数描かれているため、美術史的分析というより、風俗研究史料として分析が行われている。

二つ目の内容は、君山の書画展主催についての言及(ニ、ホ)。田邊菜穂子氏は君山著『新書画展觀款録』(文化三年二月展観、九州大学図書館相見文庫蔵)を翻刻、紹介しておられる。また、岩佐伸一氏は、大坂全体の書画会の動向を主眼とされているが、君山著『新書画展觀款録』にも触れておられるため挙げた。

— 五 —

— 六 —

三つ目は、君山が手がけた板本『漢画獨稽古』という絵の手本の紹介(へくち)。この絵本は前掲書『大阪人物誌』以降、君山の代表作とされるものの、詳細な研究等は手付かずの状態にある。このように、近年、個別の作品研究は進んでいるが、その全体像の解明には至っていない。そこで、以下、君山の全体像を探る端緒として伝記を再考したい。

### 三、同時代評価による伝記再考

平成まで殆ど研究されてこなかった君山だが、往時は、どのような記載や評価があったのか。先に挙げた泉武夫「拾遺大坂画人伝」は、伝記の典拠となった同時代史料を挙げておられるが、それらを含め再検討したい。以下の一覧では、君山及び関連が深いと考えられる人物の記載文や挿絵掲載箇所も記し、年代順に列挙した。

#### 【同時代史料による君山記載一覧】

(冒頭①～⑥は便宜的に付した。※は、田中誠一『備作人名大辞典』、泉武夫氏「拾遺大坂画人伝」に指摘の無い記載。題名『』内は原文通り。但し、引用文「」中／は改行、／は改頁・改丁、( )内に便宜的な付記を行い、適宜句読点を補った。)

※①木村兼葭堂『兼葭堂日記』巻五(目筆稿本(兼葭堂日記)翻刻編、兼葭堂日記刊行会、昭和四七年)  
寛政八(二七九〇)年一月九日  
「(割書)備中倉敷／宮本俊蔵 始来」  
同日欄外上「備中倉鋪宮本俊蔵／名仲兒仙齡号君山」

※②木村兼葭堂『兼葭堂日記』巻五(目筆稿本(前掲『兼葭堂日記』)享和元(二八〇一)年九月十日「備中宮本俊蔵」

※③奇淵編『わすれくさ』(大本四卷四冊色摺、文化二(一八〇五)年頃刊、福岡大学図書館蔵)  
挿絵一面(二図)《『初午』》落款「於峨洋堂中／宮本君山寫」  
(「春十五」丁表、色摺。\*図版I参照)

「畫名家部」「君山 同(浪花)松本氏」(\*図版II参照)  
(春下巻裏見返九名中七番目、夏巻裏見返・秋冬巻十三名中七番目)

④宮本君山編『新書画展觀款録 初編』(豆本一冊墨摺、文化三(一八〇六)年二月十二日展観、九州大学図書館蔵)  
「春花小鳥圖 伊藤玳女(割書)字玉黄／号仙年」(「浪花之部」九十

九名中五二番目、十三丁表五行目)

「陸羽煮茶圖(割書) 塩町三ノ丁目 原東野(割書) 名民老ノ字子楽」(會補) 五番目、十八丁表四行目)

「梅月圖 吳服町 木村石居(割書) 世暉ノ孔陽」(會補) 六番目十八丁表五行目)

「寒江獨釣圖(割書) 順慶町ノ初瀬丁 淵上旭江(割書) 名禎号ノ画隠」(會補) 八番目、十八丁裏一行目)

「楚蓮香圖(割書) 両替町ノ四丁目 宮本君山 (割書) 名瓊ノ字伯鳳」(會補) 九番目、十八丁裏二行目)

⑤宮本君山『漢画獨稽古』(半紙本二卷二冊墨摺、文化四(一八〇七)年九月刊、国立国会図書館蔵本)

「漢画獨稽古跋ノ君山画師、名瓊、字伯鳳、君山者其号也。ノ吉備中州之人、予同郷の友なり。天性画をノ好んで四方を遊歴すること十有五年ノ享和の初浪華に來り。居を瓦街にノ卜す。

今漢画獨稽古二冊を著はず(中略)時に伯鳳自携來つてノ予に附言を請ふ。業を同ふして又ノ同郷の友たり。何ぞ敢へて辞することを得んや。因て一言を演べて以其後にノ題すと言。ノ文化丁卯中秋旭江淵上禎白龜父書于浪華畫隱窟中「旭江」(陰刻方印)「淵禎厥字白龜」(陽刻方印)「坤卅八」表ノ「坤卅九」表)

「年」(陰刻連印)「(地卷)「五十二」丁表)(\*図版IV参照)

旭江室挿絵(一面二図)《花枝図》玉簾女「玉」「簾」(陽陰連印)(人卷「百廿三」裏ノ「百廿四」表)

『名数画譜 附録』

「淵上禎(割書) 字白龜旭江ノ備中人住浪花」「旭」「江」(陽刻連印)「九」丁表十三番目上段七列目)

「宮本■ (割書) 字伯鳳号君山ノ備中人住浪花 「君」「山」(陰刻連印)「十」丁表十五番目上段八列目)

「伊藤玳女 (割書) 字玉黄号仙年ノ君山室「仙」「年」(陰刻連印)「十二」丁裏八番目下段四列目)

「鈴川王簾女(割書) 字慈ノ旭江室淡州人」(十二丁裏十七番目上段九列目)

⑨木村孔陽編『癸酉展観目録』(小本一冊墨摺、文化十(一八一三)年九月廿五日開催、中野三敏氏蔵)

「米法山水 大原東野」(九) 丁裏一行目、「○大坂部」四十九名中十一番目)

「五星ノ(圖) 宮本君山」(十) 丁裏一行目、「○大坂部」四十九名中二十九番目)

⑥「浪花画人組合三幅対」(一枚摺、文化四(一八〇七)年刊、「保守帖」折本装、大阪府立中之島図書館蔵(前掲『近世大坂画壇』大阪城天守博物館蔵一八二頁))

「唐」(割書) 瓦町シンノサイバシ 宮本君山(中央「唐」欄上段右から六番目)

⑦「浪華画家■角力組合二幅対」(一枚摺、文化六(一八〇九)年改正(前掲『近世大坂画壇』一八三頁))

「差添人(割書) じゅんノけい町 淵上旭江」

「金田町 大原東野ノかわら町 宮本君山」(「南流家之方」二十四欄中五欄目(上段三欄目))

⑧大原東野編『名数画譜』(半紙本四卷四冊墨摺、文化七(一八一〇)年刊、架蔵本)

淵上旭江挿絵(一面二図)《三星》図「旭」「江」(陽刻連印)(天卷「十三」丁表)

君山挿絵一面(一図)《九子図》落款「君」「山」(陰刻連印)(地卷「七十八」裏(\*図版III参照))

伊藤玳女挿絵一面(一図)《女心傷悲殆及公子同歸》落款「仙」

— 181 —

⑩『浪華人物録』(文化改正、文化十(一八一三)頃(濱松歌国『撰陽奇観』卷四十五『浪速叢書』第五、五四三ノ五四四頁))

「順慶町 淵上旭江」(畫工部) 五十一名中四番目)

「上町 大原東野」(畫工部) 五十一名中八番目)

「西よこほり 宮本君山」(「畫工部」五十一名中十四番目)

⑪「追薦先考阿部良山冥福 展観諸名家書画」(一枚摺、壬午(文政五、一八一三)年二月十三日開催、大阪府立中之島図書館蔵(前掲『近世大坂画壇』二二六頁))

「宮本君山」(補助) 二十名中九番目(上段五列目)

「木邨石居」(補助) 二十名中十八番目(下段九列目)

⑫毛必華編『続浪華郷友録』(中本一冊墨摺、文政六(一八一三)年春序、大阪府立中之島図書館蔵)

「君山(割書) 画 姓宮本名政瓊字伯鳳住ノ瓦町心齋橋」(〇〇十四) 丁裏一行目、「久」の項十九名中十七番目)

⑬毛必華編『浪華金欄集』(小本一冊墨摺、文政六(一八一三)年十二月跋、大阪府立中之島図書館蔵)

「君山(割書) 画 姓宮本名政瓊字伯鳳住ノ瓦町心齋橋」(〇〇十四)

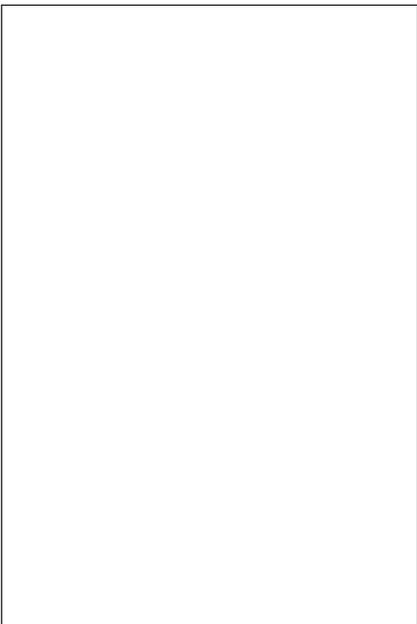
裏一行目、「久」の項二十名中十八番目)

⑭毛必華編『新刻浪華人物誌』(小本一冊墨摺、文政七(一八二四)年六月刊、大阪府立中之島図書館)

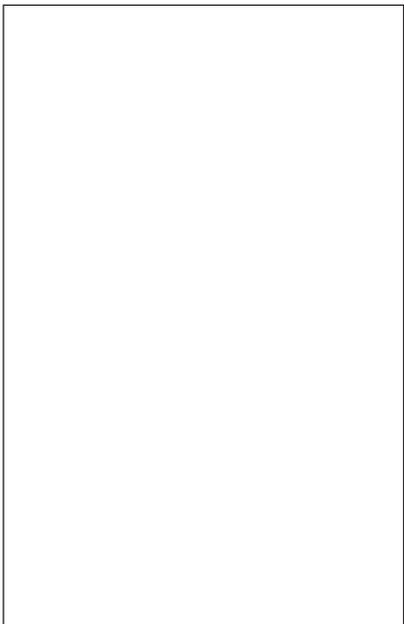
「宮本君山 (割書) 名政瓊字伯鳳又号/峨洋堂 心斎橋瓦町北宮本俊藏」(二十)丁表六番目、「畫」の項五十八名中二十六番目)

⑮木村孔陽主催「巽斎翁追薦書畫展観」(二枚摺、文政乙酉(文政八(一八二五)年)四月、(兼葭堂遺墨遺品展覧会出品図録)大正十五年、大阪市立博物館蔵を抜粋か。(近世大坂画壇)二二七、二三〇頁)(前文略)「文政乙酉四月 浪華 兼葭堂木村」<sup>〔方印〕</sup>「孔」<sup>〔方印〕</sup>「陽」<sup>〔方印〕</sup>「襲白」(横書)会助 八木巽處 高島雲溟/木村片石 中井藍江/森春溪 西竹坡/岡田半江 宮本君山/森 徹山 森川竹窓/執事 田中毛孔/泉原孝斎」(会助)十名中八番目)

※⑯宮本君山『御くしあけ』(折帖絹本着色、文政九(一八二〇)年春序、大阪歴史博物館蔵(前掲論文ロ)「宮本君山『御くしあげ』一九六頁)「(前略)おのが家、難華の瓦町といふにあり。常に小楼の上、西窓の下にありて繪をうつすをことゝす(後略)」



\* 図版 I  
奇淵編『わすれくさ』(福岡大学図書館蔵)  
宮本君山画「初午」(「春十五」丁表、原本は色摺)



\* 図版 II  
奇淵編『わすれくさ』(福岡大学図書館蔵)  
秋冬巻末「畫名家部」、刊記

この史料を基に、以下、君山の足跡、同時代評価、交友関係、三つを考察する。最初に、君山の足跡について再考したい。先に挙げた昭和期の伝記記載と異なる点が三点みえるためである。

一つ目は、君山の上坂時期だが、『備作人名大辞典』と相違点がみられる。それは、木村兼葭堂『兼葭堂日記』の記載である(①、②)。この日記に君山は二回、登場している。最初は、寛政八年一月九日の項(①)。二度目は、その五年後、享和元年九月十日の項(②)。寛政年間に、兼葭堂宅へ「始来」ことは注目に値しよう。何故ならば、『備作人名大辞典』及びその根拠となったであろう『漢画獨稽古』(⑤)にも「享和の初浪華に來り」とのみ記されているためである。だが実際は『兼葭堂日記』記載より、享和以前に君山は少なくとも一度は上坂。その後再び大坂へ来たことになる。『漢画獨稽古』(⑤)の跋文「天性画を好んで四方を遊歴すること十有五年、享和の初浪華に來り。居を瓦街にトす。」という記述と『兼葭堂日記』を照合すると、一回目の兼葭堂訪問は諸国遊歴中、二回目の享和元年九月は本格的に移住を開始した折の挨拶だった可能性もある。木村兼葭堂は、博物館に通じていたことで著名であるが、佐藤魚丸著『浪華なまり』(享和二年刊、「下五」丁表)には「唐画」(中国風の画)の流行画人としても九名中九番目に記される(以下掲載順に淵上旭江、福原五岳、岡熊岳、岡田米山人、十時梅■、大原東塾、濱田杏堂、

一九一

一九一

鶴亭、木村兼葭堂)。後述する兼葭堂親子は、共に画を嗜んでいたため、君山と同好者といえる。

以降の君山の足跡を示すものとして、『わすれくさ』(③)を挙げた。この書は刊年未記載だが、大坂の幫間から文化二年七月、秋月藩の御用絵師となった斎藤秋圃の挿絵がみられる。ために中野三敏氏は、本書の成立を「文化二年頃刊か」とされているので、筆者もその説に従った(『和本の美』福岡大学図書館、平成十五年)。

この書の君山挿絵は「初午」(\*図版I参照)。二月初午の日、大坂では特に「伏見街道稻荷前の名物土人形を賣の始とす」(『浪花十二月畫譜』上、嘉永二年刊(『浪速叢書』第十四、昭和二年、五八三頁))とされるから、君山は、土人形の馬を買って帰る様子を描いたか。用いた画風については、稿をあらためて考察したい。挿絵中には「於峨洋堂中」とあり、巻末には「君山 同」即ち「浪花」に住んでいたことが判明するため(\*図版II参照)、文化二年頃には既に大坂に移住、アトリエである「峨洋堂」を構えていたことが窺える。

話は少々それるが、本書は君山の交友関係を考える上でも興味深い。『わすれくさ』は、大坂蕉門を拡大した奇淵(花屋庵)が編纂した絵俳書。従って、君山は上坂後、俳家とも交流があったことが窺え、あるいは俳家の手つてを頼って上坂した可能性もあろう。

翻って君山は、既に寛政期には上坂した経験を持ち、その後、享

和から遅くとも文化二年頃、即ち一八〇一〜一八〇五年頃迄には大坂に移住した、と云えよう。

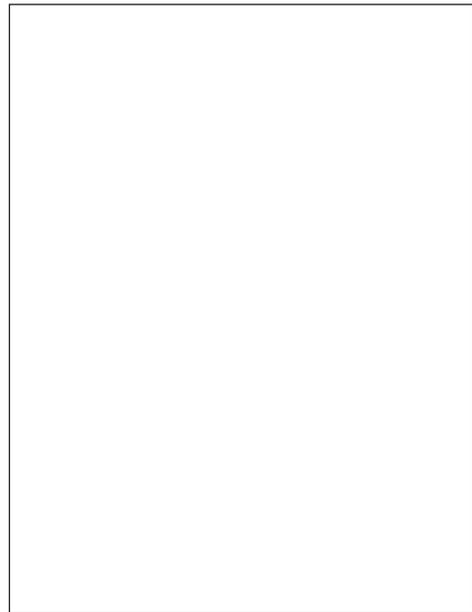
また、君山の大阪における活躍は『御くしあけ』<sup>(10)</sup>、原題には濁点無)によって、文政九年まで確認できる。尚、この画帖の分析を行っておられる中野朋子氏は、詞書末尾の落款を「文政丙戌の春／実八十政瓊」と判読され「君山は延享二(一七四五)年前後の生まれであろう」と推察される(前掲論文ロ、一九四頁)。但し、写真版の落款を確認すると「実八十政瓊」ではなく「宮本政瓊」と読めるのである(同書一九六頁)、筆者はこの説に従わないこととする。

二つ目は、君山の住所「瓦町心齋橋」についてである。『わすれくさ』<sup>(3)</sup>には、大坂市中の地名まで記されぬが、文化三年冬序『新書画展観款録 初編』<sup>(4)</sup>には、「西替町／四丁目」と、瓦町ではない地名がみえる。その後、文政期まで瓦町、心齋橋瓦町、という地名が続くが、文化十年頃刊『浪華人物録』<sup>(10)</sup>には「西よこほり」という記載が混じる。従って、主として瓦町に住んでいたが、文化年間少なくとも二回、移転した形跡がある。移転とはいえ、東横堀川、西横堀川、長堀川、土佐堀川に囲まれた半里四方、いわゆる「船場」内の移動でしかならう。これは、君山が他国出身者であることに因むか。もとより「船場」は各種の間屋・仲買が軒を並べる「商い所」であり、『国史大辞典』八巻、昭和六二年)、「瓦町」は

「二丁目には炭屋善五郎、二丁目には米屋太兵衛と両町とも豪商が住んだ町であった。」(『大阪府の地名』平凡社、昭和六一年)とされ、殊に「建築関係商が多かった」(『角川日本地名大辞典』二七、昭和五八年)とされる。時代は半世紀上がるが延享版『難波丸綱目』には、関東筋はじめ、備前・備後を含めた諸国の問屋もみえるから、いわば寄り合い所帯で君山のような他国者も寓居しやすかったのやもしれぬ。

三つ目は、文化七年刊、大原東野編『名数画譜』<sup>(7)</sup>の記載により、妻帯が明らかになることである。田中誠一『備作人名大辞典』にも「配伊藤珪」と記されるが、その典拠は『名数画譜』であろう。この書には、君山と同時に、「君山室」すなわち妻である「伊藤珪女」が挿絵を寄せ(\*図版IV参照)、附録にその名が記載される。なお、珪女については、君山主催『新書画展観款録』<sup>(4)</sup>にも「浪花之部」五十二番目に「春花小鳥圖」出品が確認される。穿った見方をすれば、妻珪女は、陰になり日向になって君山の画業を支えたか。珪女の出身について記載がないため、君山と同郷人か、大坂人であるのかは不明だが、夫婦共に画技を嗜み、大坂で暮らしていたと考えられる。

次の観点、君山の同時代評価に話題を移す。文化年間の評として「浪花画人組合三幅対」<sup>(6)</sup>、「浪華画家」<sup>(8)</sup>角力組合「幅対」<sup>(7)</sup>を



\* 図版Ⅲ  
大原東野編『名数画譜』(文化七年刊、架蔵本)  
宮本君山画、國方春熙(紫溪)書「九子図」(地巻「七十八」丁裏)



\* 図版Ⅳ  
大原東野編『名数画譜』(文化七年刊、架蔵本)  
伊藤珪女画「女心傷悲殆及公子同婦」(地巻「五十二」丁表)

— 111 —

挙げたい。前者では「唐」、後者では「南流家之方」<sup>(8)</sup>に属し、双方中国風の絵を描くと評されていることは注目に値しよう。また、前者では上段、即ち大坂で「唐」風の絵を描く者の内、十本の指に入る絵師と評され(右から記載順に岡熊嶽、岡田米山人、藤九鸞、大原東野、岡琴嶽、宮本君山、僧愛石、秦黄山、岡田半江)、後者では『名数画譜』<sup>(8)</sup>の編集を行った「大原東野」と同梓に並ぶ。文政年間に入っても、君山は、『統浪華郷友録』<sup>(12)</sup>、『浪華金襴集』<sup>(13)</sup>、『新刻浪華人物誌』<sup>(14)</sup>に、それぞれ「画」の得意な者として記載され、その活躍が続いたことが分かる。従って君山は、文化文政期「中国風の絵が巧みな者」として、大坂で認められていたと云えよう。

最後に、君山の交友関係について考えたい。君山は、大勢が出品する書画会を主催した経験を持つ。実際『新書画展観款録』<sup>(4)</sup>では、大坂以外の出品が八十六名、「浪花之部」に九十九名、「浪花近在之部」に三名、「會補」に自分を含めて九名が掲載されるため、交友範囲が広がったことは想像に難くない。実際、二章で挙げたように、既に相見香雨氏によって、君山が野呂介石に「親炙して益を受けた」と指摘しておられることも念頭に入れておかねばならないだろう(前掲論文イ参照)。

そこで、本稿では、先に挙げた一覧から特に交流が考えられる人物を四名挙げる。

筆頭に挙げられるのは『兼葭堂日記』①、②を記した木村兼葭堂（元文元（一七三六）年生、享和二（一八〇二）年没）とその息子、孔陽（石居、生年不詳、天保九（一八三八）年没）との関係である。当時、全国的な著名人であった兼葭堂と面会できたことは、君山にとって、大きな出来事であつたらう。定住前の寛政年間に兼葭堂と面会しただけでなく、兼葭堂死後も追慕していた跡が、書画会への参加から偲ばれる。木村孔陽編『癸酉展観目録』⑨は兼葭堂十三回忌、木村孔陽主催「巽斎翁追薦書畫展観」⑩は二十五回忌追善の書画会。君山が出品および会を助力したのは、兼葭堂追慕の念からであろう。同時に、書画会の主催者であり息子である孔陽とも付き合いがあったと判明する。実際、君山が主催した書画会『新書画展観款録』④中には、先に挙げたように「會補」即ち、書画会開催を助ける者として九名中六番目に、孔陽の名が見える（「會補」は記載順に、岡田米山人、藤九鸞、鼎春嶽、武内華亭、大原東野、木村石居こと孔陽、中村芳中、淵上旭江、宮本君山）。このように、兼葭堂との出会いに端を発し、息子孔陽とも書画会を通じて交流していたと考えられよう。

三人目は『名数画譜』⑧を編纂した大原東野。東野も、君山と同様、大坂出身ではなく「南都人」、即ち奈良の人で「浪花住」（『名数画譜』附録、刊記）。また、先に挙げた『浪華なまり』（享和二年跋）中、「唐画」の流行画人としても、九名中六番目に記される。『国書君山著『漢画獨稽古』の蔵版者が、共に「紀藩」（紀州藩）の者であること（前者は「紀藩 南嶺館」、後者は「紀藩 楮鞭館」。紀州藩は、君山、東野の出身地ではない。話は君山と東野との関係から少々外れるが、君山と紀州との場合であれば、紀州藩士であり画人でもあつた野呂介石との繋がりが思い当たる（二章前掲論文イ参照）。従って、君山は介石をはじめ紀州藩の人物と交流があつたことは間違いないからう。では、東野の場合と紀州藩の場合は如何であろうか。東野と介石の知見の有無は未詳。他方、君山の方が先に自著『漢画獨稽古』を上梓しているため、君山が紀州藩の人物と何がしかの橋渡しになったやも知れぬが、これは推測の域を出ない。いずれにせよ、二書共に上梓のいきさつは未詳だが、君山、東野、共に紀州藩の人物とも交流があつたことが窺える。

話を東野と君山の交流に戻そう。東野と君山の付き合いは、先に挙げた木村孔陽編『癸酉展観目録』⑨に、共に名前がみえるだけではない。先述の木村孔陽、後述する淵上旭江と同様、君山自身が主催した書画会にも東野の名があることは注目に値しよう。君山主催『新書画展観款録』④中、「會補」に、孔陽、旭江と共に東野の名もみえるためである（東野は九名中五番目）。主催を助ける役として参加したことが確認できるため、直接交流があつた可能性が高からう。

人名辞典「一卷（岩波書店、平成三年）によると、博物学に通じ、人物画を得意とし、晩年は讃岐に移り住んだらしい（明和八（一七七二）年生、天保十一（一八四〇）年没）。一覽には挙げなかったが、東野も、寛政十年十二月十四日を筆頭に享和元年十二月まで計二十四回、『兼葭堂日記』にその名前がみえる。大方、博物学の面でも話が弾んだことであろう。君山と同様、兼葭堂追善の書画会『癸酉展観目録』⑨にも名前がみえることが、前掲「拾遺大阪画人伝」にて既に指摘される。但し、文政八年、木村孔陽主催「巽斎翁追薦書畫展観」⑩にはその名が無い。東野が讃岐に移った時期は不詳だが、この時には既に大坂を去った可能性もあるう。

また、編著書についていえば、右の一覽には掲載しなかったが、東野編『五畿内物産図会』（五巻彩色摺、文化十年刊、国立国会図書館蔵）には、君山挿絵が四面（二図）（『潮干』（巻一「六」裏「七」表）、《嵐山》（巻四「七十七」裏「七十八」表））掲載される。『五畿内物産図会』は、約百二十名の人物が挿絵を寄せるが、例えばその一頁、丹羽桃溪は一面（二図）のみの参加。従って、君山挿絵の方が紙面は四倍で、巻一、巻四、それぞれ最初の挿絵を占めている。そのため、並み居る絵師の中でも、東野と君山は近い関係にあつたと推測できよう。

その他、板本において気になるのは、東野編『名数画譜』⑧、

— 131 —

— 134 —

先に挙げた「浪華画家」■角力組合「幅対」⑦において、東野と君山は同枠であつた。この記載を別な角度からみると、当時の大坂では二人の交流が周知され、肩を並べて活躍したと評されていたために、同枠で記載された可能性もあるう。

以上、君山と東野の関係について、三つの観点（兼葭堂親子との交流、板本制作、書画会への参加）から鑑みるに、東野の大坂居住中（少なくとも文化年間。⑩参照）、君山と付き合いがあつた可能性が高いと考えたい。

四人目は、君山著『漢画獨稽古』⑤に跋を寄せた淵上旭江（生没年不詳。旭江と君山には、類似点が四つある。一つ目は、双方備中（岡山）の出身者であること⑤、⑧）。

二つ目は、双方「唐画」を得意としたこと。前掲『浪華なまり』（享和二年刊）では、「唐画」の項にて九名中筆頭に挙げられる。旭江は、京都の大西酔月（生年不詳、明和九（一七七二）年没）門下とされ、前掲『近世大坂画壇』含め、今日の美術史では「写生派」に位置づけられる。だが、『浪華なまり』から鑑みるに、当時の人々にとっては、先に挙げた兼葭堂や東野と同様「唐画」の範疇だったのであろう。その為、ここは「唐画」で聞こえた人物としておく。

尚、旭江の画人としての活躍について付記すると「浪華画家」■角力組合「幅対」⑦中、「差添人」として別枠で大きく掲載され

ていることは注目に値しよう。『浪華なまり』で筆頭の記載であったことと勘案すると、当時の大坂画人として別枠に挙げられる位、実力、名声共に備わっていると評された様子も窺えよう。

三つ目は、大原東野編『名数画譜』⑧挿絵掲載より、二人とも妻が絵を嗜んだと判明すること。更に旭光の室の場合、同書附録により「淡州人」即ち淡路島が出身地と分かる。

四つ目は、木村兼葭堂との付き合いがあったこと。但し、この面では断然、旭江が君山を上回る。『兼葭堂日記』を紐解くと、寛政六年八月廿六日、初めて来た時から、兼葭堂没年に至るまで、足かけ九年合計六十日も登場し（淵上旭江）十一日、「淵旭江」一日、「旭江」四八日、「旭江子息」も一日、記載される。このように、父子共に面識があり懇意であったことが窺える（前掲『兼葭堂日記』）。その為、木村孔陽編『癸酉展観目録』⑨に旭江の名が無いことに聊か疑問が残る。

旭江は文政四（一八三三）年には、既に没していたであろうことが泉武夫氏によって指摘され（前掲「拾遺大坂画人伝」）、大坂での活躍期は君山よりも早い。従って君山にとっては、大坂における同郷の兄貴分であった可能性もあろう。自分が主催した書画会の記録『新書画展観款録』④にも「會補」として九名中八番目、即ち自分の名前の直前に旭江を記し、その兄事ぶりが窺える。その結果、君山

第二に、同時代評価については、従来の指摘通り「唐絵」（中国風の絵）が得意な者として化政期の大坂で認められていたことを追認。また、妻伊東氏の出自は未詳ながら、夫婦揃って大坂で漢画を嗜んでいたことを確認した（『名数画譜』文化七年刊）。

第三に、交友関係については、君山が書画会の主催・補助等によって、交際が広がったことは想像に難くないものの、大坂在住の木村兼葭堂、孔陽親子をはじめ、他郷人大原東野、同郷人淵上旭江、といった、「唐画」という同好を持つ大坂居住者と、書画会や出版を通じて親交があったことを考察した。

このように君山は化政期の大坂にて、他国出身者ながら約四半世紀の間、絵師として活躍したことが再確認できた。

「江戸前乃隠士 平亭銀鶏」こと畑銀鶏（寛政二（一七九〇）年生）明治三（一八七〇）年没）は『街能囃』（天保六年刊）において、大坂の風土、人気について以下のように評している。

「撰津國大坂は古より入津集會の地にして南に海濱を受、北に山をかまへ、寒暑程能来りて風俗至つて實義ある上國なり。されば人氣もいとおだやかにして詔ふことなく、諸國運送のいとまには風流の道に心を寄る人いと澤なるゆゑ、國々より入込處の漫遊家もひとたび此地に遊ぶときは、思はず足を留る者昔より今に至る迄其かず擧てかぞへがたし。」（『發端』『街能囃』卷之二「丁表裏」）

は単著『漢画獨稽古』⑤跋文に記される通り、著書を「自携」し旭江に直接会い、跋文を依頼したのであろう。依頼の理由は、旭江が当時の大坂における著名な画人としてだけではなく、同郷人として兄事していたためと推察できる。

以上、君山の人的交流について、大坂在住の木村兼葭堂・孔陽親子、大坂で知り合った他郷出身者大原東野、同郷人淵上旭江と、幅広い様相を呈したことを考察した。

#### 四、むすびにかえて

本論文では、宮本君山研究序論として、同時代史料を整理し、以下、三つの観点から伝記の再考を行った。

第一に、君山の足跡については、定住前に寛政八（一七九六）年に上坂、木村兼葭堂を訪問したことが分かる『兼葭堂日記』の記述を紹介。その五年後、享和元（一八〇一）年から遅くとも文化二（一八〇五）年頃には完全に定住したことを指摘した。居住地については、瓦町が主であったが、文化年間、二度移転した記載があること（両替町（『新書画展観款録 初編』文化三年序）、西横堀（『浪華人物録』文化十年頃））を整理。また、文政九年まで瓦町で活躍した形跡があることを確認した。

— 一五一 —

この言葉はそのまま君山の生き様にも該当しよう。「天性画を好んで四方を遊歴すること十有五年」（『漢画獨稽古』跋文）即ち、諸国を長年遊歴した君山も、銀鶏御指摘の御多分に漏れず、大坂の居心地の良さに四半世紀も大坂に寓居する羽目となったのであろう。それは、大原東野、淵上旭江夫妻もまた然りと云える筈である。

本論では君山の交流を中心に進めたが、これは大坂全体の出来事として換言したい。即ち、より巨視的にみた場合、近世大坂騒壇は、兼葭堂や桃溪といった大坂根生いの人物だけで形成されているのではなく、君山、東野、旭江といった関西文化圏の人々を取り込み、形成・展開して行くという特徴を、君山の人物交流から指摘したい。今回、触れることが出来なかった君山の挿絵と画風について、また君山と大坂騒壇全体との関わりを含めて、今後の研究課題としておく。

#### 〔附記〕

本稿は、東アジア日本語教育・日本文化研究学会二〇〇六年度国際学術発表大会での口頭発表の前半を基に作成しました。執筆にあたり、図版掲載を御許可頂きました福岡大学図書館、並びに御指導、御査読を賜りました中野三敏氏（九州大学名誉教授）に、記して深甚の謝意を表します。

— 一六一 —